

今年**今**年は巳年。毎年、干支に関連する本を図書室では置いています。『へびのクリクター』（文化出版局）や『たのきゅう』（教育画劇）など、「へび」が登場する本を中央の平台に並べています。そんな中でも「へび」の写真絵本は子どもたちの食いつきが違います。怖い物みたくもあると思いますが、おそろおそろページを開いたり、なでてみたり、苦手な大人が多い中、じっくり時間をかけて読んでいる姿をよく見かけます。

今年新しく加わったのは『へびのニョロリンさん』（童心社）です。「蛇」と「へび」、漢字の方が何だか怖いと思うのは私だけでしょうか。「へび」が「ニョロリン」とくれば、怖さ半減のうえ、親しみも感じてきませんか。トメばあさんの屋根裏に住むことにしたへびの「ニョロリンさん」は「おはニョロございます」と挨拶もバッチリ。おばあさんと「ニョロリンさん」のほのぼのとした日常が楽しい絵本です。

今後も昔話や創作本、図鑑などから、干支の動物が登場する本を探してレパートリーを増やしていきたいと思っています。今年はぜひ「へび」の本にご注目ください。



季刊**トライホークス** 2025年 | 78号
発行日……2025年3月4日 | 発行人……中島清文
発行所……徳間記念アニメーション文化財団
東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館
編集……石光紀子 小泉奈里子 | デザイン……川島弘世
印刷……TOPPANクロレ株式会社 | 非売品



スタジオジブリの美術

1月22日にパイインターナショナルより『スタジオジブリの美術』が刊行されました。

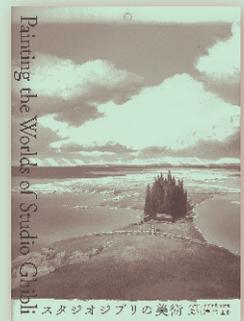
この本には、1984年に公開された「風の谷のナウシカ」から2023年の「君たちはどう生きるか」までの劇場公開作品の中から844点の背景美術が掲載されています。

この本の特色のひとつは、長年スタジオジブリ作品に参加し美術監督も務めてきた武重洋二さんが監修をしていることです。作品ごとに描かれ方も違えば、使う色も違います。作品世界を描いてきた武重さんによって、全ての作品から一点一点の絵が選ばれ、印刷時の色味も確認されました。本のカバーは「君たちはどう生きるか」の一場

面です。絵の上部には薄い「○」がありますが、これは背景画の上にキャラクターの絵を合わせるためのタップ穴と呼ばれるものです。通常フレームに切り取られて見えない部分ですが、そのまま再現されています。

そして、もうひとつの特色は、劇場公開作品の背景美術が一冊にまとまっていることです。作品ごとのアートブックはありますが、一冊に集められているのはこの本が初めてです。今まで「作品が一冊にまとまった本はないのか」と聞かれることが多かったのですが、その要望にお応えできる本だと思います。

この画集の中にはジブリの作品世界がつまっています。吹き抜ける風や日



スタジオジブリの美術
スタジオジブリ責任編集
監修…武重洋二
パイインターナショナル 13,200円

差しの暖かさ、湿り気、匂い、映画の中で感じたこれらの世界がどう描かれているのか、一筆一筆じっくりご覧になれる本です。好きな作品、忘れられないワンシーンを臨場感と共に楽しんでみてください。

間崎ルリ子

Ruriko Masaki

子どもと共に楽しんだ本

子どもの本の翻訳、家庭文庫、声に出してお話を語るストーリーテリングなど、様々な形で子どもたちに本を届けてきた間崎ルリ子さんに本を紹介していただきました。以前、ストーリーテリングを聞いたとき、自分の中にお話の一場面が浮かび上がる新鮮な体験をしました。お話を耳を傾け、お話の世界を味わうことを大切なものと考え活動されてきた間崎さんが選んだ本です。読む、語る、聞く、様々に楽しみたいと思います。

* * * * *

47年間神戸市の自宅毎週土曜日の午後、近所の子どものために蔵書を開放して開いていた「鴨の子文庫」で、そこにやってくる子どもたちと共に、また自分自身の3人の子どもたちと共にずいぶんたくさんの本を楽しんできました。

私は、子どもの読書は子ども自らが目で読むのではなく、耳から聞く読書が主であるべきだと常々考えています。子どもにとって、紙の上に横たわる記号のような文字を読んで、そこに書いてあることを実際の事物や生命あるものとしてとらえ、楽しむのは難しいと思うからです。そして長年の経験の中で、子ども時代にたくさんの本を読んでもらって本を楽しんだ子どもほど、一生を通じて読書を楽しむ豊かな人生を送っていることを知りました。お話を語ったり、声に出して読んで聞かす人は、読むものを自分なりにイメージして、そこに命を吹き込んで語り（読み）ます。そこでそれを聞く人はそれを、命を持ち実態をともなったものとして受け取り、起こることを楽しむことができるのです。

というわけで、私はずいぶんたくさん本を子どもたちと共に分かち合い楽しむことができました。そこで今日は、その中から、特に自分の子どもたちと何度も楽しんだ本をご紹介します。長男がまだ1歳になる前から楽しんだ『ちいさなねこ』をはじめとして、6年生のとき読んでやったアーサー・ランサムの『ツバメ号とアマゾン号』や『ホビットの冒険』にいたるまで、本当にたく

さんの本があるので、選ぶのは難しいのですが、一応10冊を選んでみました。

ビアトリクス・ポターの「ピーター・ラビットの絵本」シリーズはどれも本当によく楽しみましたが、あえて一冊選ぶとすれば『りすのナトキンのおはなし』でしょうか。ほかのリスたちはフクロウ島の主のブラウンじいさまのところに、木の実をとらせてくださいと貢ぎ物を持って出かけ、丁寧に許可を願い出るのですが、生意気なナトキンだけはブラウンじいさまの前でびよんびよん跳びはねながら謎かけをしようとしています。その生意気ぶりが幼い息子たちは嬉しいらしくて、キャッ、キャッ笑いながら聞いているのですが、最後は笑いごとどころではありません。でも、しっぽをとられただけですんだ懲りないナトキンはそのあとも、木の下を通る人に棒を投げつけて、「くっくーくるるーくっくっく！」というのです。

息子たちが大学生のとき、家族で初めてイギリスの湖水地方に出かけ、100年前から今にいたるまで作者のビアトリクス・ポターが描いた時そのままに残っている風景を驚嘆しながら楽しみました。そして『りすのナトキンのおはなし』の舞台となったダーウェント湖にいき、ボートをかりてこぎ出し、フクロウじいさまの島へも行きました。今はこの島（実際は聖ハーバート島という名前ですが）には上陸は許されていないようですが、当時はそういう規制はなかったので、上陸し島の中を散策しました。すると突然息子たちが、「ナト

キンがビー玉あそびをしたのがこの切株だ!」と興奮してさげび出しました。見れば確かにその本の24ページにある切株とそっくりの形の古い切株があるではありませんか! でも、いくらなんでも100年以上も前の切株がそのままあるとは思えず、切株というものはみな似たようなものだから、と思いはしましたが、それよりも私が驚いたのは、本をそこに持って行っていただけでもないのに、彼らがその形を記憶にとどめていたことでした。(私は切株の形なんか覚えていなかったもので、本当かしらと思いつつ写真に撮って帰り、帰ってから本と比べて確認しました!) 子どものときの印象が子どもの心にどれほど強く残っているかを知らされて驚かされました。

もう一冊、家族みんなを笑いの渦に巻きこんで幸せな思い出となっている本があります。『ぼくとくらししたフクロウたち』は、カナダのサスカチュワン地方の大自然を背景に、「ぼく」ことビリーたち少年ののびやかで愉快的生活がつづられたお話です。息子たちが4年生と3年生、娘がまだ幼稚園児だったころに読んでやったお話です。

木の上のミミズクの巣を確認しようと木に登ったミラー先生の奮闘ぶりや、自分は飛べるということを知らないで、木にも爪を使って登っていたミミズクの「クフロ」がある時、木の枝の先で進退きわまってどうしても飛ばざるを得なくなって、自分が飛べることを知った時の狼ばいぶりのおか

しさ! などなど、抱腹絶倒の出来事を聞きながら(こちらは読みながら)家族全員お腹をよじて笑いました。まだ学校にもあがっていない娘にはその内容がわかったかどうかあやしいのですが、私のとなりに座ってお兄ちゃんたちが笑い出すと自分も負けじと笑い出し、ほかのもの同様その瞬間を存分に楽しんでいました。

本人たちに確認したことはありませんが、みんなで心を合わせて笑ったその瞬間は、きっと子どもたちの心の中のどこかに生きていて、人生の何かの折に彼らを支えてくれたのではないかと思います。

まさきるりこ

1937年、長崎市に生まれる。慶応義塾大学図書館学科卒業後、ボストンのシモンズ・カレッジの大学院で図書館学を学ぶ。その後、ニューヨーク公共図書館児童室に勤務。1968年から2015年まで、神戸市で「鴨の子文庫」を開く。訳書に、『もりのなか』『パンやのくまさん』(ともに福音館書店)、「くんちゃん」シリーズ(ペンギン社)、『あひるのピンぼけ』(瑞雲舎)、『詩集 ライラックの枝のクワタドリ』(こぐま社)、共訳に『ストーリーテラーへの道』(日本図書館協会)、『つばさの贈り物』(京都修学社)など多数。

トライホークスの本

ウィリアムの子ねこ
作・絵…マージョリー・フラック
訳…まさきるりこ
徳間書店 1,870円



1

1 りすのナトキンのおはなし
作・絵…ピアトリクス・ポター 訳…しいいももこ 福音館書店 770円



2

2 ぼくとくらししたフクロウたち
作…ファーレイ・モワット 訳…稲垣明子 評論社 1,650円



3

3 ロビン・フッドのゆかいな冒険
作…ハワード・パイル 訳…村山知義/村山亜土 岩波少年文庫 ◆1・2ともに品切重版未定



4

4 ちいさなねこ
作…石井桃子 絵…横内 襄 福音館書店 1,100円

◆ ちいさいおうち
文・絵…バージニア・リー・パートン
訳…しいいももこ 岩波書店 1,870円

◆ 三びきのやぎのからがらどん
絵…マーシャ・ブラウン
訳…せたていじ 福音館書店 1,320円

◆ だいくとおにろく
再話…松居 直 画…赤羽末吉
福音館書店 1,100円

◆ いたずら きかんしゃ ちゅうちゅう
文・絵…バージニア・リー・パートン
訳…むらおかはなこ 福音館書店 1,320円

◆ ツバメ号とアマゾン号
作…アーサー・ランサム 訳…神宮輝夫
岩波少年文庫 上880円/下968円

◆ ホビットの冒険
作…J.R.R.トールキン 訳…瀬田貞二
岩波少年文庫 上968円/下913円

本棚より

トライホークスに置かれているおすすめの本を紹介していきます。
トライホークスの本棚の中の一冊から、みなさんの本棚の一冊にさせていただけたら嬉しいです。

地球の長い午後

ブライアン・W・オールディスの『地球の長い午後』は今から60年以上前に書かれた小説です。舞台は太陽が星としての寿命を迎えようとしている数十億年先の地球です。月の引力により地球は自転を止め、植物が君臨する世界となっています。熱気と濃い空気が満ちる中、全てを覆いつくす植物は鞭や触手を持った奇怪な形の食肉樹として猛威をふるっています。太陽が放つ強い放射線がほとんどの動物を死滅させ、生き残ったわずかな動物も独自の進化を遂げていました。

人間は樹上で細々と生き、肌は緑色、背丈はかつての5分の1と姿形も大きく変化し、思考力も衰えていました。小さなグループを作り、女が長となり、男は子種を持つ貴重な存在として守られ、子どもはグループで育てています。集団で行動する彼らにとって、長に従えない者は異端児です。疑問や好奇心を持ち、他の子どもたちより“考えること”が多いグレンは、グループの中で孤立し追放されてしまいます。けれど、それ故に未知の場所に足を踏み入れ、かつての地球やこの先の未来を語るアミガサダケと出会います。思考力を持つ数少ない生物であるアミガサダケは、グレンに取り付き新しい知識や見方を教えてくれる一方で、グレンを支配しようとするのです。

アミガサダケに頼るものもあれば、支配を厭い離れるものもいる、それぞれが選んだ道は生きようと思つての選択です。もちろん、誰が生き残っていくのかは後の時代にならないとわかりませんが、まるで進化の分岐点を見ているような気がします。退化したかのように見える人間の姿も、生きていくために必要なものを選び残していった姿であり、時間をかけて進化していく先が、太古の昔に戻る、近づくことだってあるのかもしれない。時間も空間も取り込み、圧倒的な存在感を持つこの世界をぜひ体感してみてください。

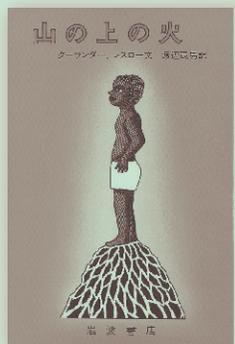


地球の長い午後

著者…
ブライアン・W・オールディス
訳…伊藤典夫
ハヤカワ文庫SF 1,188円

エチオピアのお話より

山の上の火



山の上の火

文…クーランダー、レスロー
訳…渡辺茂男
岩波書店 2,090円

昔、アジス・アベバという町にアルハという若者が住んでいました。アルハはハプトムという金持ちの召使いでした。ハプトムはお金でやれることは何でもやってしまい、時々とても退屈になりました。ある日、ハプトムはアルハに「冷たい風の吹いているスルタ山の上で、ひと晩中着物も着ないで死なずにおることができたら、家と牛とヤギとりっぱな畑をやろう」と言ったのです。アルハからこのかけの話を聞いた物知りじいさんは言いました。「スルタ山から谷をこえた反対側の岩の上で火を燃やしてやろう。おまえは、その火を見つめながら、あったかい火のことを考え、おまえのために火を燃やし続けている、このわしがいることを考えるんじゃ」

次の日、スルタ山の上で、アルハは遠くのちかちかした明かりを見つけました。自分のために火を燃やしてくれているじいさんを思いながら、アルハはひと晩中立っていました。ところが、ハプトムは「火があったのなら、それは約束を守ったことにならん」と言って、約束の家畜も畑もくれなかったのです。

この後、難くせをつけたハプトムは「遠くの火で体が温まるのなら、匂いでお腹がいっぱいになるか」と問われ、自分のしたことを改めます。機知を働かせた返しが面白いだけでなく、誰かを思うその温かさが小さな灯となって感じられる、アフリカの北東部、エチオピアの昔話です。